

著者：バーバラ・マイルズ
あとがき：ハーラン・レイン
挿絵：レベッカ・マーシュ

盲ろう者にとっての手の重要性

目の見えない人、耳の聞こえない人、あるいはこれらの感覚機能を著しく欠く人は、通常ならばこうした感覚機能が提供するであろう情報を補う手段が与えられるべきである。ハーラン・レインの言葉を借りるなら、このような人には「モダリティに合った刺激」（1997）が与えられるべきだ。最も一般的に、盲ろう者の目や耳の機能の代わりをするのが手である。ハーラン・レインやオリバー・サックスが述べているように、脳は幸いなことに非常に高い可塑性を持っている。一つの感覚器官がより多く使われると、脳はその感覚器官を通した情報をより効率的に処理するようになる。点字使用者や弦楽器の奏者など、広範に指を使う人々は、「指の皮質再現の増加を示している」（レイン、1997）。更に、視覚や聴覚の処理に当てられていた脳の部分が触覚による情報の処理に再配置され、手により多くの知力を与える。このようにして、盲ろう者の手は、道具としての通常の役割に加えて、有用で知的な感覚器官となり、視力や聴力のない人々がそうでなければアクセスできないような物や人々、言語へのアクセスを可能にする。ここで心に留めておくべき重要なことは、子供が小さい時、脳は最も可塑性があり、最も適応力があるということだ。それゆえ、盲ろうの子供ができるだけ早い時期によく調整されたリセプターとして手を使うことを習得できれば、情報の取得に手を最大限に活用するようになる可能性が高くなる。

盲ろう者の手はしばしば、追加の役割も担う必要がある。それは（手を使うすべての人々にとってそうであるように）道具であり、また（欠落している視力と聴力を補完するための）感覚器官であるだけでなく、声にもなり、あるいは表現するための主な手段にもなっている。手話やジェスチャーは表現的なコミュニケーションの主な手段となる。そのような任務を遂行するために、手は、

言葉を形作ることに加えて、その語調や感情のニュアンス、意味の強調といったことを表現できるように、独自のやり方で熟練されていなければならない。

盲ろう者の手は、道具として、感覚器官として、また声として機能し、とても大切であるので、彼らの教育者や親、友人は手に対してとりわけ敏感になることが極めて重要である。視力のある子供のデリケートな目を決して突いたりコントロールしたりしないのと同様に、それと等しくデリケートで、目の機能を果たさなければならない盲ろう児の手をコントロールしないよう学ばなければならない。盲ろう者の最良の発達のために、彼らの手を読み取り、やり取りする術を学ぶ必要がある。それは盲ろう者に唯一残されたモダリティであることが多いので、彼らの手がアクセスできるような情報を提供する術を学ばなければならない。彼らは「手に対して手の言語を話し」、「手から手の言語を読み取る」必要がある。

こうしたことをうまく行なうために、典型的な発達において、また盲目の子供や聾の子供の発達において、手の果たす役割を理解することが大切である。こうした理解を持つことは、盲ろう者の手の発達を促すために教育者や親、友人が彼らと巧みにやり取りする助けになる。

初期の発達における手の役割

盲ろう者であるかないかにかかわらず、誰にとっても、乳幼児期の手のスキルの発達は、外の世界への自己意識の出現の発達と並行している。手を道具として使う能力が発達したおかげで、私たちは物や人々に対処する力や外の世界を探究し、動き回る力に自信を持つようになった。このような発達を入念に記録したことにかけては、セルマ・フレイバーグ（1977年刊行の本、*Insights from the Blind*（邦題：視覚障害と人間発達の探求））の右に出るものはいないだろう。通常の発達について彼女とその同僚たちが学んだことのほとんどは、まず盲目の子供数人の発達を注意深く観察した理解から得ている。こうした子供たちを観察することで、彼女たちはすべての子供たちがどのようにして手を使うのか、また手がどのようにして個人の成長に貢献するのか、よく考えるようになった。

新生児の手はまだ道具として機能していない。両手ともたいてい体の両脇で肩の高さまで上がっており、無作為で本能的な動きを行なっている。また、手の伸長とその手の方向への頭の回転が同時に起こる緊張性頸反射を伴うことがある。この反射によって赤ん坊は自分の手を見るようになる（フレイバーグ、p. 150）。緊張性頸反射が出なくなると、頭の中線への方向付けと両手をこの中線で同時に引き合わせる無作為の動作が、指で触ったり、指を動かしたり、指を握ったりすることで、赤ん坊の視覚と触覚に報いを与える。乳幼児が手や腕の動きの視覚的な経験とそれに合わせて感応する筋肉の経験を結びつけ始めると、手の動きをより良くコントロールする可能性が生まれる。手を伸ばし、掴み、落とし、投げる。乳幼児はこれらすべてを何度も繰り返し、そうすることを通じて、より確かに外の世界に影響を与えることができるようになる。

一年目の後半には、手と目の連係の達成、および手を伸ばし握る能力が可動性に決定的な動機をもたらす。乳幼児はある物、あるいは人を見て、それを握ろうとしてそちらへ動く。手と目がこの子供を自分の体を越えた外の世界へと引き出す。乳幼児は、外の世界がだんだんわかってくるにつれて、またそこを探り影響を与える能力に自信がつくにつれて、はいはいしたり歩くことにより報いを感じるようになる。

手はまた、言語の発達にも極めて重要な役割を果たす。すべての子供において、手は表現の大切な形の一つである。我が子が習得したての「バイバイ」や投げキスするのを見せびらかす誇らしげな親を、誰もが目にしたことがあるはずだ。このようなジェスチャーは言葉を話し始めるのに先立って起こることが多い。言語の発達において最も大切なジェスチャーはおそらく指差しのジェスチャーであろう。母親がある対象の名を呼びながら（「ほら見てごらん！ ワンちゃんよ！」）それを指差すことで、共通の話題を確立し、子供が確実に自分と同じものに注目するようになっている。すると、その物を指した言葉がその子にとって意味を持つようになる。最初の言葉を覚え始めた幼児は、名指しするという新たなスキルを確認する方法として、指差しながら母親や他の大人をちらりと見ることを繰返し行なう。この指差しのジェスチャーは手を伸ばすことによ

つながり、それが手と目の連係の自信につながる。すべての子供において、こうした手のスキルを発達させることが言語習得の土台を築く。

盲目の子供における手の発達

目の見えない乳幼児にとって状況は明らかに異なる。第一に、緊張性頸反射や中線に両手を持っていくことは視覚的な報いをもたらさない。おそらくそのせいで、通常、手が本能的で反射的な動きから独立して、意識的なコントロール下に置かれ、欲望や意志の主体としての役割を果たすにはより長い時間がかかる。

実際のところ、視力のない子供が、手を道具として、また分化した知覚の器官として使うようになるのは大変な仕事である。セルマ・フレイバーグは、まずピーターという名の男の子、そして盲目である他の多くの幼稚園児たちを観察し、こうした子供たちの手がしばしば乳幼児の手の位置、つまり肩の高さにずっと置かれたままで、手の持つ能力をいまだ認識していないことに気づいた。盲目の子供たちは、中線に両手を持っていくスピードが遅く、また意図的な把握を発展させること、つまり手を伸ばし、握ることも遅い。

フレイバーグはまた、ピーターの手や他の盲目の幼児の手が、とても長い期間、口のような振る舞いをしたことにも気づいた。それはまるで歯であるかのように、掴み、「噛みつき」、またつまんだ。彼らの手は、口が物を取り込み受け入れるのに費やすのと同じような努力をしているように見えた。手は道具になっていたが、それは大まかなものだった。それで、「手による物の探求の楽しみ」(p. 33)を見つけるまでに多くの練習や改善が必要であった。ピーターの手が独立した感覚器官になるためには、そして口とは別に単独で外の世界の探求に興味を持つようになるには、ピーターは更に集中したやり方で手を使って物を投げつける段階を経験する必要があるように思われた。セルマ・フレイバーグは、こうした投げつける行為が「骨格筋を口と分離するプロセス」(p. 47)の一環であると推測する。彼女は、(そのほとんどが同じような、しかし期間的にはより短い、投げつける段階を経験する)目の見える子供たちもまた、この時期に独立して動くことを学び始めること、それゆえ、自らの骨格筋を使う機会や良い意味での身体の攻撃性や能力を経験する機会を得ていることを観察

している。盲目で、（「外の世界」にある物にまだ興味を持っていないので）移動の初歩さえ習得していない子供は、彼の攻撃性の出口となる大きな筋力を持たないというピーターと同じ立場にあるかもしれない。それゆえ、彼はこのエネルギーのはけ口として口と運動している自らの手を使うかもしれない。フレイバーグは、ピーターが安全に投げることを許可され、奨励された時、それを徐々に集中した方法で行なうようになり、するとつまんだり引っ搔いたりという人々に対する攻撃性が急激に下火になったことを観察した。

盲目はまた、この制約を持って生まれた子供の手にもう一つの途方もない務めを課している。視覚の助け無しで、子供は周囲の環境にある物に永続性を与えることを習得しなければならない。子供は物の直接的な経験を持つことなく、その物が存在することを確実に知る必要がある。この子にとってそうするための唯一信頼できる手段は手と耳である。目が見え、耳が聞こえる、正常に発達している乳幼児においては、すべての感覚器官が連係することでこれが達成される。見たり、触ったり、ことによれば聞いたり、匂いをかいだりできる物は、それがなくなるのを目で追うことができ、見えない時にも聞くことができ、聞こえた時に目でその場所を突き止めることができる。乳幼児（通常は9ヶ月頃になるまで）は自分以外の物や人の存在に自信を持つまでこうした経験を積み重ね、なくなった物を探し始めるようになる。物の永続性を達成すると、自己概念の発達において大きな一步を踏み出すことになる。周囲の人々や物ではない「私が存在する」と感じることを習得するのである。

盲目の子供が物の永続性を達成するのは、通常、目の見える子供よりも遅い。彼は、お気に入りのおもちゃの音が、おもちゃがその場に存在することを示すことをとてもゆっくりと習得する。それと同じぐらいゆっくりと、それに手を伸ばすことを習得する。こうした確信が子供を外の世界に引きつけ、可動性の基盤となる。フレイバーグは彼女がロビーと呼ぶ男児の記述の中で物の永続性の感覚を培うつかの間の段階を記録した。こうしたプロセスの頂点において、ロビーが10月と10日の時、（単に物を叩いたり、それを握って叩きつけたり、それを落としたり、投げたりする代わりに）指で探るような仕草で物を触っているのが初めて観察された。こうした指使いは、彼がついに「これは自分の行動とは独立して存在する、それ自体が独自の性質を持っている物である」(p. 192)

と理解したことを示唆しているように思われる。その3週間ほど後、ロビーは初めて、音の合図を受けただけで、ある物に手を伸ばした。その3日後、彼は初めてハイハイをした。この男児を重要なブレークスルーへと導いたのは、何週間、何ヶ月もの試行と遊びであり、これらを通して彼は、手からの情報と耳からの情報を連係できることを習得していった。彼はまた、自分の手と耳が外の世界についての信頼できる情報を与えてくれることも学んでいた。

目の見えない子供の言語発達において手の担う役割は重要である。フレイバーグの最も重要な発見の一つは、盲目の子供の手がとても表現豊かで、目の見える子供の、微笑んだり、見つめたり、顔の表情を作ったりする役目を引き受けことが多いということだ。探索したり意図的に手を伸ばしたりできる前でさえ、楽しいことや興味のあることに反応して興奮した動きをする。フレイバーグは、母親や養育者が世話をしている盲目の子供の手に気づくよう教育することができたなら、彼女たちはそこから多くを読み取ることができることを見いだした。それができない母親は、しばしば、子供との関係の崩壊を経験している。これは、通常このような関係の基盤となるお互いの目を見つめたり、微笑み合うことが盲目の子供との間で不可能であることが原因と思われる。フレイバーグは、子供の手から微笑みや興味の兆候を読み取ることを母親に教えることが、ポジティブで双方向のやり取りを保持し、健全な発達に必要な初期の母子の結びつきを強める助けになることを見いだした。

指差したりジェスチャーすることは、盲目の子供にとって、目の見える子供にするのとは当然ながら同じ意味を持たない。その結果、目の見えない子供の最初の言葉は、しばしば、特徴的な音を出す物を名指す言葉だったり、子供の手の届く範囲内によく存在する物を名指す言葉だったりする。子供が物に触っている時に、あるいはそれが出す音を聞いている時に、その物の名前を聞くことは、子供が名前と物をつなげる助けになる。盲目の子供にとって、お互いの皮膚接触が指差しジェスチャーに最も近いものである。その子に共通の指示対象があること、名指しされた物が彼と彼に話しかけている者との共通の話題であることを最も確実に知らせることができるからである（皮膚接触の的確性が重要であり、これについては後に述べる）。セルマ・フレイバーグは、皮膚接

触と言語の発達との関係を観察し、ピーターが「対象物を見つけ、扱い、区別し、名前を付けると、彼の語彙はとても早いスピードで増えた」（p. 43）ことに気づいた。

聾の子供における手の発達

聾の子供の手は、正常な発達の順序（目に入った情報と連係することを学び、手を伸ばし、握ることを学び、そしてより自信を持った自己の主体となる）をたどる。また、一般に、耳が聞こえ、話すことができる子供の手よりもずっと広い範囲で、声の代用をするという追加の任務を担う。最近の言語学の研究によれば、聾の子供は、無作為でだんだんと差別化した手の形を作つて「片言を話す」ことがわかつた。これは、彼らが後にアメリカ手話（あるいは、その子供の母語となる手話）の手の形を作るのに役立つことになる。生まれた時からの聾で手話に触れている子供は、耳の聞こえる子供が声で片言を話すのとだいたい同じ時期にこのような「片言話」をする。また、耳の聞こえる子供が声を使って最初の言葉を発声するのとだいたい同じ時期に手の形を作り（最初の言葉を「話し」）始める（クイングリー＆ポール、1984、p. 95）。聾の子供の手が表現の主な手段として奨励されると、典型的な時期にその役割の能力を担うようと思われる。

盲ろうの子供における手の発達

盲目の子供が初期の結びつきや物の永続性、手の自主性、可動性を達成する大変さを鑑みると、目も見えず、耳も聞こえない子供がこれに輪をかけた困難に直面することは想像に難くない。加えて、盲ろうの子供の手は、聾の子供のほとんどがそうであるように、声の役割も果たさなければならない。幸い、盲ろうの子供の多くは、いくらかの残存視力、また/あるいは残存聴力があり、それを活用して手を使う発達のマイルストーンを進んでいくのに必要な連係を持つことができる。残存視力、また/あるいは残存聴力の上手な教育が、盲ろうの子供が結びつきや物の永続性、手の自主性、手の表現性を達成するのに極めて重

要である。これらはすべて、強い自己の意識、自主的な可動性、そして言語の進歩を達成するための必要条件である。

視覚にも聴覚にも頼ることのできない場合において、手は探索する能力を達成し、可動性の動機づけとなる物の永続性の安定した感覚を培う助けをし、外の世界における自分の体のイメージや自己意識を組み立てる助けをし、そしてさまざまな方法で感情や考えを表現する能力を培うといった任務を広く担わなければならない。盲ろうの子供の手は、視力や聴力の助けなしで、好奇心を高めなければならず、探し、探し、手を伸ばし、そして握ることを学び、より広い範囲の感情や考えを表現できるようにならなければならない。このような子供にとって、手は外の世界との主な接点であるので、こうした発達が起こることは極めて重要である。手を教育することがなければ（あるいは、手が使えない場合、他の情報獲得手段で補うことがなければ）、自己と外の世界との区別はなく、言語の習得もなく、また最も基本的な考え方の先にある認識力の発達もないだろう。

発達途上にある盲ろうの幼児の観察を通じて、私は彼らの手の発達が主要な養育者との対話的なやり取りと密接に関係していると信じるようになった。多くの場合、乳幼児の、あるいは幼児の最初の探索するような手の動作がある種の自己刺激であることを観察してきた。これはしばしば手を口に入れたものであったり、手を体の別の部分に置いたものであったりした。自分の体を越えた先の外の世界へと手を伸ばす最初の試みは、安全で安定した体のサポートを持って起こり得る。そして、こうした探索の自分の体以外の最初の対象は、養育者の体であることが多い。母親や他の養育者の顔を探索することは、それが奨励され、強調されると、何度も何度も繰り返される。それがいざれは外の世界のさらなる探索へと発展していく。このような探索が奨励されないと、子供の手は情報を得るために手を伸ばすことを習得しない。すると手は自らの体に固定されたままになる。

極めて重要な問いは、そのような触覚の探求をどのように奨励し、外の世界へと拡張していくことをどのようにサポートするかである。乳幼児や幼児の手を

どのように教育すればよいだろうか。そして、更に成長した盲ろうの子供の教育をどのように継続すればよいのか。子供が確信を持って外の世界へと手を伸ばし、主な表現の手段として手を使うことを奨励することになる的確な皮膚接觸とはどのようなものだろうか。

盲ろう者に手の発達と表現性を促す指導の技術

ここで述べることは、全盲の人々を前提としている。しかし、これらの提言のほとんどは、外の世界の概念を強めるために基礎をなす触覚の助けを必要とするこの多い弱視や難聴の子供や大人にも（とりわけ発達の初期段階において）有効に適用できる。

1. 子供や大人の手を見て、またあるいは触って、その意味することを読み取る。

これはセルマ・フレイバーグが盲目の子供の母親に与えたアドバイスを踏襲したもので、簡単そうに見えるかもしれないが、実際に行なうのは難しい。目が見える人は、感情や注意の形跡を相手の顔を見て確認することに慣れてしまっている。盲ろう者の手を理解できるようになるのは、訓練してこそ得られるスキルである。盲ろう者の手が何を表現しているのか理解を深めるために、自分の目を使うのと同じように、手を感覚器官として使えるように習得することができる。子供や大人の手を触り続けることは、その意味することを読み取る助けになる。フレイバーグはこう記述している。「私たちが盲目の赤ん坊の顔から手へと注意を移すなら、そこに探したり、せがんだり、好んだりといった雄弁な身振りによる言語を見出すことができるだろう。そしてこの身振りの言語は最初の6ヶ月の間にどんどんと区別化されていくものである（p. 107）」

2. とりわけまだ言葉を使えない幼児との会話のやり取りにおいて、手を話題のイニシエーターとする。

目は見えるがノンバーバルである子供は通常、大人とのやり取りを始めるのに片言で話したり、見つめたり、ジェスチャー（指差しする、手を伸ばす、押しやる）をする。見つめることは、子供と母親、あるいは養育者の間での話題のとりわけ強力なイニシエーターである。目が見えず、耳も聞こえない子供はこの手段を使うことができない。盲ろうでノンバーバルである子供と意味のあるやり取りを望む者は、その子が興味を持つ話題でやり取りできるように、何に注意を払っていて、何に興味を持っているか見つけるためには、どこか他を探さなければならない。盲ろうの子供にとって手がしばしば話題のイニシエーターとなる。それは、その子供がその時点で何に注目しているのかを示していることが多い。

子供が手で行なっていること、触っている物はそれが何であっても、やり取りの話題となり得る。簡単に興味をひける話題は、通常、子供自身の体に関わることであったり、側にいる者の体に関わることであったりする。盲ろうの幼児は、まず、自分の体ができること、側にいる者の体ができること、またそれがどんな感じであるかに关心を持つ。一番早い段階では、注意はまだ手に集中されておらず、体全体に置かれているように思われるが、これは、幼児や発達段階の初期の子供が体全体の動きで喜びを表現することに見られる。今、たまたま手が触っている物に幼児が興味を持つよう奨励することは、その子が発達において成長する役割を果たす。注意を徐々に、体全体から手を中心としたものに移していくことができれば、この子はそこから恩恵を受けるだろう。その子の手は、全身ではできないやり方で、外の世界に影響を与えるからである。それを奨励するには、非指示的で反応的な皮膚接触を使うのが一番である。

応答

3. 探索に応えたり、話題を始めたり、また感情を表現するために、手を手の下に置く皮膚接触を使う。

盲ろうで往々にして無力に見える子供は養育者が助けようとする行動を引き起こしがちである。最もよく使われている類の助けは「手の上に手を乗せる」やり方である（子供の手の上に教師の、あるいは親の手を乗せる）。日常的に、それだけを行なうことで、手の上に手を乗せる皮膚接触は、盲ろうの子供の手

が受動的になり、相手の手からの指示を待つようになり、また情報や刺激を求めて外の世界に触れることを避けるようになるよう条件付ける。これはまた、その子が触っている物から自分の手の上に置かれた手へと彼の注意を移動させる。

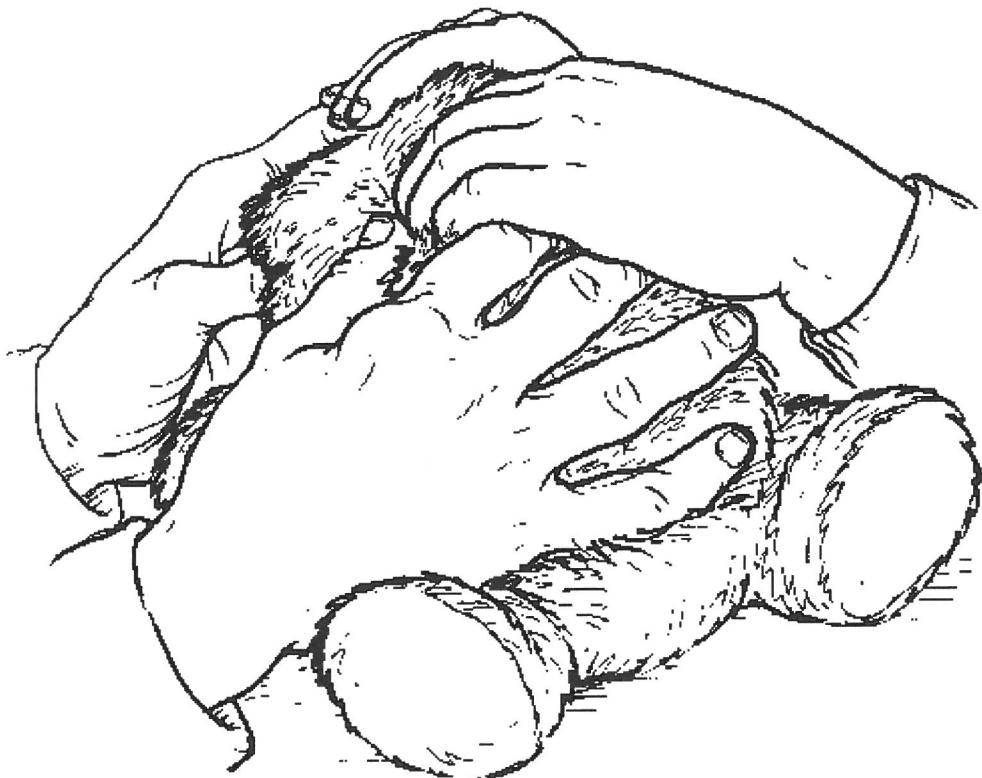


図 1. ある物と一緒に探索する時、教師の手がわずかに子供の手の下になっている。

多くの場合、盲ろうの子供（あるいは大人）に触る最も巧みなやり方は、手の下に手を置く方法である。子供の手がある物を、あるいは自分の体の一部を、また別の誰かの体を探査している時、その子の手の下の部分、あるいは直接手の横側をやさしく触ることは、触覚による指差しジェスチャーに相当する。このような皮膚接触は、共通した話題を確立し、言語の発達の下地を作る。この皮膚接触を的確に行なうことが重要である。このような種類の手の下に手を置く皮膚接触は、三つのゴールに留意して、注意深く行わなければならない。

この手の下に手を置く皮膚接触（あるいは、指を指の横に置く皮膚接触）は：

- コントロールなしのものである。
- あなたが同じ物を触っている、あるいは同じ動きをしているという経験の共有を子供に知らしめる。
- 物を触っているという子供自身の経験の最も重要な部分を妨げない。

「乳幼児が母親と共有しながらある物に積極的に取り組んでいる時に最初の言葉、あるいは最初のジェスチャーを発する可能性が最も高い」（アダムソン、ベイクマン＆スミス、1994、p. 41）ということが最近の研究でわかっている。ここで紹介した皮膚接触の類（大人の手が子供の手のやや下に入る、あるいは大人の指が子供の指のすぐ横に付く）が注意深く、また繰返し行われることで、盲ろうの子供はある物（あるいは動き）への注意を共有する機会を持ち、それが最初の言葉を発する下地を作る。

4. 子供がそれを望むなら、あなたの手を自由に触らせる。

子供は信頼できる道具として自らの手を使うようになる前に、その子はしばしば、他の誰かの手を信頼し使うことを行なう。幼児が大人の手を握って、それを自分が操りたい物の上に置くのを誰でも見たことがあるだろう。盲ろうの子供がそうすることを可能にするためには、その子が自由に触ることのできる大人の手がなければならない。視力なしで、それが可能であることは触覚で経験される必要がある。最も有効なジェスチャーは、通常、掌を上向きにした両手を軽く子供の両手の下に置き、両方の人差し指をその子が掴めるようにしておくことだ。その子に少しでも視力があるなら、同じジェスチャーをその子の前で行なってもよい。このようなジェスチャーで、またそれを繰返し何度も行なうことで、「私の手はここにありますよ。好きなように使っていいですよ。できることを何でも探索してごらんなさい」と伝えることができる。この時、大人の手に緊張があつてはならず、また子供が道具として使えるようにしなやかでなければならない。通常、子供はこうした手の提供を受け入れ、手を掴み、それらを動かしていろいろと試みる。このシンプルなジェスチャーから多くの

ゲームや手による会話が発展し、子供は外の世界と関わるのに自らの手を使う能力に自信を持つことができる。



図2. 教師の手が下になって、子供が道具として使うのに応じている。

5. あなたの手を子供の手の下に置き、その子の手のアクションを真似る。

模倣は励みを与える最良の方法である。それは子供に自らの手への気付きをもたらし、表現手段としてのその力を強める役に立つ。これは母親が子供の音や動き、顔の表情を模倣することを本能的に行なうのに相当するものである。子供が手をバンバン叩いたり、拍手したり、手を振ったり、開いたり、閉じたり、小刻みに動かしたり、握手したり、指を出す度に、あなたが子供の手を見たことを子供に知らせ、かつその子の活発な手の動きを邪魔しないやり方で、こうした行為を模倣する。このような模倣は訓練を要する技であるが、子供が声としての自らの手により大きな自信を持つという収穫をもたらす。

6. インタラクティブなハンドゲームを頻繁に行なう。

盲ろうの子供にとってのこうしたゲームは、話し始める子供の片言ゲームに相当するものである。（こうしたゲームは、可能な時にいつでも、片言ゲームの代わりではなく、その追加として使われるべきである。）ゲームは子供の動きの模倣の後に続けて行なってもよく、自分で考え出したり、だんだんと手の込んだものにしてもよい。手を叩く、指を広げる、閉じる、指を這わせる、くすぐるなど、こうした動きやその他の動きはすべて、子供が大人の手に最大限に触れられるようにしながら、楽しく、交替に行なってよい。

7. 子供の発達レベルに合わせ、環境の準備をして手のアクティビティを奨励する。

体の中線におもちゃや興味深い素材を置くことは、両手を同時に使うことを習得しなければならない子供には特に重要である。おもちゃをベビーベッドやりり・ニールセンがデザインしたような「小さな部屋」の中に吊るすことは、子供が両手を連係する能力を発見し、こうしたスキルへの自信を促す助けになる。残存しているいくらかの聴力を活用できる音を出すおもちゃであれば、あるいは興味深い生地のおもちゃであれば、特に貴重である。子供の握る能力に注目し、こうした能力に見合ったおもちゃを提供することもまた、重要なことである。例えば、尺骨-掌握り（掌に対して指を置く握り）の子供は指先でつまむことを習得している子供とは異なるおもちゃを与える必要がある。

子供が自らすすんでそうした物に興味を示し始めたなら、どんな種類がその子の興味を引くかに注意して、それに似た、しかし少し異なったおもちゃを追加で与えることが大切である。そうすることで、子供の触る経験を拡張する助けになり、それがその子の手のスキルと自信を培う助けになる。継続して興味深い触感を持つ物を与え続けることが極めて重要である。

8. 適切な状況下での、また適切な発達時期における力いっぱいのスローイングを奨励する。

盲ろうの子供の発達には子供が手の使用に自信を持つことが極めて重要であるので、いかなる手の動作も奨励することが大切である。スローイングは手の動作であり、また大きな筋肉の動作もある。これまで見てきたように、これはまた、安定した物の永続性と自己意識の感覚の獲得と関係した、視力のない子供にとってとりわけ大切な発達の段階の一つであるように見受けられる。手触りの良い布を使ったビーンバッグは安全で満足できるスローイングにとりわけ適している。スローイングによって、子供、あるいは他の誰かが危険にさらされることのない安全な環境は、養育者が適時にこの動作を許可し奨励することを可能にする。ゆえに、子供がこのようなやり方で手を使う能力にアクティブな自信を培う助けになる。

・9. 子供がさまざまなアクティビティを行なっている間中、あなたの手を自由に触ることを促す。

盲ろうの子供や大人の親や教師、また友だちは、料理や掃除、物の組み立て、洗濯、探索、他の誰かとのコミュニケーション、また単に気楽に休むといった活動をする時に、自らの手をこうした子供や大人に自由に触らせることで、彼らに外の世界の豊かな経験をたくさん与えることができる。彼らが手の下に手を置くポジション（彼女の手が別の誰かの手の上に置かれる）に抵抗を感じなければ、言葉を使って（「XXを触りましょうか？」）、あるいはそのままあなたの手をやさしく盲ろう者の手の下に置いてアクティビティに移動させることで、あなたの手を自由に触らせるよう誘うことができる。盲ろう者の手の下にあなたの手があれば、盲ろう者は自由に手を離すことができ、またこうしたジェスチャーも指示というより誘いと受け取ってもらえる。子供が皮膚接触にこれまで多くのポジティブで非指示的な経験をしてきたとすれば、あなたの行動を探索することに興味もやる気も示すことだろう。やり取りの中でこのような機会を何度も何度も提供することは、盲ろうの子供の手や心を訓練することになり、また盲ろうの大人に外の世界のアクションや物質に触れ、他の誰かとやり取りをする選択肢の継続した機会を提供し続けることになる。

関係者の手話に触れることで手話による会話を「耳にする」機会を盲ろう者に与えることは、大切であり、定期的に提供すべきものである。このような会話に触れる誘いがなければ、盲ろう者は他の人たちのやり取りを目撃する経験を持てず、自分に向けられたコミュニケーションしか知らない偏った経験だけを持つことになる。それがその人の経験のすべてであるとすれば、それは明らかに社会的な影響を与える。他の人たちの会話と実際に接触することは、盲ろう者の経験をバランスの取れたものとし、外の世界での経験を広げる助けになる。

10. 盲ろう者が周りの環境を頻繁に触知することを促す。

これは当たり前のことに思われるかもしれないが、よく忘れられがちなことである。盲目であっても鋭い聴力を保持する人は、耳を通して多くを学ぶことができ、会話や音からその存在を推測した興味ある物を触らせて欲しいと頼むことができる。盲ろう者は、自分の手の届く範囲外に何があるのか、ほとんど手がかりを持たない。それゆえ、そうした環境にアクセスできるようにするためにには、自分の周囲の人々の善意に頼るしかない。新しい環境に入る時、盲ろう者がその環境になじめるようになることが特に大切である。盲ろうの子供は、対象物や環境について言葉で意味をなす描写ができるまでに、そして実際の皮膚接触の代わりに通訳者のサービスから恩恵を得られるまでに、何度も何度もそれを触る経験を重ねる必要がある。

11. 子供や大人に獲得してもらいたい手のスキルの手本を示し、その手本を自由に触らせる。

あまりにもしばしば、盲目の子供、あるいは盲ろうの子供は、まずは教師や養育者が彼らにしてもらいたいと望むアクティビティの動きに手を合わせて手のスキルを見せられることが多い。このような補助は操ることが困難な子供にとって貴重である一方で、その子がそのようなアクティビティを行なう前に、またそうするように導かれる前に、まずあなたがそれを行なうのを「見る」ことができるなら助けになることである。アクティビティが相互の合意に基づいていると思われるなら、モデリングは最も自然に起こり得る。子供に対してして

あげるのではなく、一緒に行なうようにすること。例えば、歯磨きといったアクティビティは、あなたが子供と同じ時に歯を磨くようにそれを習慣にすれば、そしてあなたがそのアクティビティを行なっている間、その子があなたの歯ブラシや動きに触ることを勧めれば、子供がそれを簡単に手本とすることができます。

盲ろうの大人は、このモデリングや相互関係から大きな恩恵を得ることができます。例えば、作業場で、盲ろうの従業員の隣で同じ仕事を行ない、作業をしながらその盲ろうの従業員に自らの手を触らせることは、多くのコミュニケーションをしていることになる。彼らは手のスキルを手本にするだけでなく、持続した注意力といった他の仕事のスキルをも奨励している。これに加えて、盲ろう者の帰属感をも肯定することになり、孤立している、分離されていると感じる代わりに、「私たち」の一部になる。この帰属感は、盲ろう者と共に働く者が彼らの手を巧みに使うことを通して作られたものである。

12. 盲ろう者の手が言語に自由にアクセスできるようにする。

多くの盲ろう者にとって、確実に言語にアクセスできる唯一の感覚器官は手である。耳の聞こえる幼児は、初めて言葉を発する前に、何千もの言葉を耳にしている。盲ろうの子供は、言語を理解し始め、初めて言葉を発する前に、何千もの言葉に触る必要がある。それも、そうした言葉が表している事柄を経験している間に、その言葉の意味を付すことのできる形で言葉に触る必要がある。つまり、その子がそれに触っている時に、彼女にその物の名前を示す、それを行なっている時に、その行為の名前を示す、それを経験している時に、その感情の名前を示すということである。

手話は通常、触れることで言語へのアクセスを可能にする最も効率的な方法である。アラスカのイヌイット族の盲ろうの子供は、自然と手話に触れる環境にいる。その文化において、狩猟を行なう時に離れた距離間でやり取りするのに使うため、人々はすでに手話を知っているからである。子供が聾であるとわかるとすぐに、その家庭では一貫して手話を使い始める。単にアクセスできる手

話があるというだけで（また彼らの住居はとても狭いことがそれを更にアクセスしやすく、ゆえに皮膚接触が起こりやすくし）、この文化において生まれつき盲ろうの子供はしばしば、4、5歳になる頃には多くの手話を獲得している。（ロンダ・ブッデとの私信、1997年3月）。盲ろうの子供の教師、親、また養育者は、学級や家庭の中に同じような文化（盲ろうの子供が手で、あるいはそれが可能な時には目で言語を聞くことのできる文化）を作り出すとうまくいくであろう。手や目に対して言語へのアクセスを可能にすることは、一度に一つの手話を教えることとはまた異なる。子供や大人は、一貫して意味のある環境に触れることで言語を習得する。一度に一語ずつ習うことによってではない。個々の言葉を教えることは、時として必要であるが、アクセスできる言語に全般的に触れるというコンテクストの範囲内においてのみのことである。

触手話は、盲ろう者と向き合いながら、目の見える人に対してするのと同じように行なうことができる。相手があなたの手に軽く手を置いて（上記した相互の皮膚接触、ゲーム、探索を実践した後で）それに従うことに抵抗がないなら、彼女は自らの手であなたの手話を読むための最も効率的な手のポジションを見つけるだろう。（テレサ・スミスの触手話に関する詳細な助言を参照。）

手話およびタドマメソッド、触知の手がかり、対象のシンボル、二次元シンボル、そして点字はすべて、目の見えない、または耳の聞こえない人の手が言語にアクセスできるようにする方法となるものである。あなたが話す時、盲ろう者の親指を軽くあなたの下唇に置かせ、音が振動する場所であるのどに指を広げて置かせることは、彼女が音の振動を区別することを可能にし、それが言語へのアクセスの可能性を広げる（この手のポジションはタドマポジションと呼ばれている）。触知できる手がかり、また/あるいは対象のシンボルを使ってアクティビティを表現することは、今何が起ころうとしているのか子供に示す最初の象徴的な方法の一つであり、また言語に触知的にアクセスできるようにする最初の試みとして使うことができる。点字および/あるいはテキストラベルに触ることは、目の見える子供が文字に自然に触れることに匹敵する。盲ろうの子供は、それが読めることが要求されるずっと前に、まず簡単なラベルに触れることができる。これは目が見える子供が家や学校のさまざまな種類のラベ

ルに気付き始めるのと同じように、子供に触知できる、あるいは点字のラベルが存在すること、またこれらが物や人を表していることを認識する機会を与えることになる。

13. 感情や実際的な働きの扱い手としてのあなた自身の手に気づくようになる。

毎回皮膚接触する度に、その接触の質に応じて何かを伝達する。盲ろう者は見るものや聞くことに主な注意を集中する人々よりも繊細に、こうしたコミュニケーションを読み取ることができる。接触する時、何を伝達しているのかだけに気づいている必要がある。接触は、私の生徒や友人が長年、私に教えてくれたように、幅広い感情を伝達することができる。私の手が動くスピード、私の皮膚接触の軽さや重さ、私の手の暖かさや冷たさ、これらを含めた多くの要素はすべて、幸せ、悲しみ、怒り、いらだち、失望、そしてその他多くの感情を伝えることができる。接触する時に私たちの手が何を言っているのかにもっと気づくことができれば、それはコミュニケーションの助けになる。しかし私たちにはそれをいつも完全に意識できているわけではなく、あるいは手が伝達していることを統御できているわけでもない。ここで、盲ろう者である生徒、友人、家族が大きな助けとなり得る。彼らは私たちの感情を反映してくれ、私たちがそれをより意識し、より気づいていられる助けをしてくれる。しかし、これは私たちが彼らの反応に敏感に気づいており、また彼らのフィードバックを歓迎して初めて実現する。

手は感情だけでなく、意図を表現することもできる。実際的な働きを伝達することもできる。皮膚接触は、指示、質問、感嘆、招き、あるいはその性質によって簡単な、また複雑なコメントでありえる。こうした実際的な機能は、会話が言葉によるものでも、よらないものでも、それが多用され過ぎると、こうした会話のやり取りを抑制してしまうことがある。コマンドが多すぎたり、「教師的な」質問（質問者がすでに答えを知っているもの）が多すぎることは、簡単なやり取りの流れを途切れさせてしまう。これが真実であることは、自らの会話の経験を振り返るだけで十分わかるだろう。コメント、純粋な質問、また

誘いはしばしば、更なるやり取りを促す。その結果として、確実に言語を使いこなす能力を持たない者も含めて盲ろう者とやり取りする時、こうした意図を伝達するやり方で接触する方法を習得する必要がある。例えば、物理療法士は子供に特定の動きをするよう指示する代わりに、その子にそうした動きをすることを求める方が有益だとわかるかもしれない。やり取りの間に中断して子供が興味を持っていることについて皮膚接触でコメントするのは、さらなるやり取りを生むことになるだろう。コメントは上記#3で説明した手の下に手を置く接触の形でもあり得るし、また同感を意味する非指示の接触でもありえる。それはまた、目が見える人にそれを伝える時、目を合わせたりうなづくことで伝達するのと同じように、単に「あなたの言ったことを聞きました」というジェスチャーの模倣でさえもあり得る。指示や命令、また何らかの質問とは別個であるコメントの最も大切な特徴は、要求を全く含まないことである。これは相手がそれに答えるか答えないかの自由を与える。

盲ろう者とのやり取りにおいて手を使ってコメントできるようになるには、常に指示を出すという誘惑、その人に何かをしてあげたいという誘惑に耐えることが必要とされる。こうした誘惑はしばしば、少なくとも私自身の経験では、感覚器官の欠陥により多くの助けを必要としているように見える人を助けたいという自然な欲望から生まれるものだ。それに耐えるには、その盲ろう者の自然な能力を、それがどのような形であっても、信頼し尊重し始めが必要とされる。私が彼女の手に常に指示を与えなくても、彼女が自分で発見するだろうこと、そして私が指示する問い合わせをしなくとも、彼女自身の観察と考えを見つけるだろうことに気付き始めることが必要である。これを実現するためには、彼女の手に自らを表現する自由と時間を与えなければならない。また、私自身の手を（その典型的な機能である）道具としてだけでなく、感覚器官としても、また高度に区別された感情を伝える声のようなものとしても使えるようにする必要がある。

丁寧な皮膚接触が感情や共感を伝える役目をした経験について、ある大人の盲ろうの女性が次のような平易で慰められるコメントを残している。

病院で手術を受けた時のことを覚えています。麻酔からさめかけた時でした。まだ完全に覚醒しておらず、補聴器もメガネも外してあったので、音も聞こえず、物も見えず、孤立したような気持ちになり始めました。すると突然、私の腕を撫でる手を感じました。それは、すべてが順調で、うまくいっていると私に語りかけていました。あの手は私にとってかけがえのないものでした。それはあの時、目に見えるもの、耳に聞こえるものよりずっと多くを私に伝えてくれました。（ドロシー・ウォルトとの私信、1997年4月）

また別の、若い盲ろうの女性が、以下のような詩の形で彼女の生活における手の大切さを表現している。

私の手、私の手は…私の耳、私の目、私の声…そして私の心。手は私の望みを、私の要求を表現してくれる。手は暗闇の中で私を導く光。

手は今、自由だ。もう聞こえる世界、見える世界に束縛されることはない。手は自由で、私をやさしく導いてくれる。手を使って私は歌う。聾者にも聞こえるほどの大きな声で、盲人にも見えるほどの明るい声で、私は歌う。

手は私を暗い沈黙の世界から解放してくれる。手は私の人生の窓。この窓を通じて、私は真に見る、真に聞く。

私は青空の中の太陽を、音楽や笑いの喜びを、しめやかな雨のやさしさを、犬の鳴き声の荒さを経験する。

手は私と外の世界をつなぐ鍵、私の耳、私の目、私の声…私の心。

手は私。

アマンダ・スタイン、1997年

私たちは皆、手について、また知る方法としての皮膚接触について、学ぶことがたくさんある。皮膚接触は、私たちの文化の中でなおざりにされている感覚であり、手は表現の手段としてしばしば無視されている。どうすればよりうまく手を使えるか学ぶことにおいて、盲ろう者は私たちの教師となってくれるだろう。

バーバラ・マイルズはあらゆる年齢の、またあらゆるレベルの盲ろう者について豊かな経験を持つコミュニケーションの専門家/コンサルタントであり、教師である。マイルズは盲ろうの子供のコミュニケーションの問題について地域や国レベルで、また国際レベルでセミナー指導の経験を持つ。マイルズの論文は *the Journal of Vision Impairments and Blindness* や *Deafblind Education*、また地域のニュースレターに掲載されている。